

「スマイリーという原点、 SMILYBASEという入口」



長田電機工業株式会社
名古屋工場
杉本 清 工場長

「自分にとって スマイリーシリーズとは」

ユニットづくりの話になると、
「デザインって大事ですよね」
と言われることがあります。

そのたびに、私はこう答えています。
「デザインは大事。
でも、何より使いやすさです」。

医療機器は、毎日、何年も、患者さんと術者を支え続ける道具です。見た目が良くても、使うたびに無意識の負担が積み重なるようでは、現場にとっていい道具とは言えません。

デザインは入口としての役割はあるけれど、主役ではない。あくまで、商品の価値を引き立てる存在だと考えています。

私は入社して最初の5年間、工場でユニットの椅子下台・上台の組み立て、検査、生産技術に携わっていました。ラインを流れる椅子を毎日つくり、検査で一台一台の動きを確かめる。

その中で強く感じていたのが、
「操作のために力や意識を使わせる設計は、
現場ではストレスになる」ということでした。
その後、椅子の設計を一貫して担当するようになり、最も技術を学ばせてもらったのがスマイリーシリーズです。

入社38年、
開発現場で腕を磨いてきた技術者。
長年OSADAのものづくりを
支えてきた杉本氏に、
スマイリーについて率直な想いを
インタビューしました。



当時のOSADAには、
バックレストを油圧で動かす技術が
まだ確立されていませんでした。
だからこそ挑戦する価値があった。
試作しては壊し、直して、また考える。
その失敗と改良の積み重ねが、
今のOSADAの椅子機構の土台になっています。

私にとってスマイリーは、
「自分の技術の原点」であり、
「今につながる基礎をつくった場所」です。



1991年発売
オサダスマイリーノーベル

1998年発売
スマイリーGM8001

OSADAと出会う最初の一台 — OSADA SMILY BASE

新商品、SMILY BASEも、考え方の根っこは同じです。

SMILYBASEは、OSADAと出会う入口になるユニット。でも、入口だからといって「手を抜いていい理由」にはなりません。むしろ入口の商品ほど、困らせない・迷わせない・頑張らせないというOSADAの誠実さが、にじんでいなければならぬと思っています。

そのために、SMILY BASEでは機能を見直しました。

- ・大柄な患者さんでも肩が落ちず、はみ出さず、しっかり支えられるバックレスト形状
 - ・術者の視界や動きを妨げないヘッドレスト形状
 - ・アシスタントが移動せずに患者さんのポジション変更を操作できるスイッチの追加。
- 操作を意識せず、診療に集中できる動線と操作性



これらは「ついている・ついていない」の話ではありません。先生の診療そのものを支えるために外せない機能です。

もちろん、見た目にも応えたいと思いました。それは、新しさを感じてもらうきっかけとして必要だからです。



そこで採用したのが、白×黒のツートンカラー。暗くなりすぎないように、テーブル、チェア、スピットトンなど、一箇所ずつ黒をアクセントとして効かせています。あくまで主張しすぎない、スパイスとしてのデザインです。



※把手の黒塗装はオーダーメイド品です。

私の理想は、OSADAのユニットを知らない先生の選択肢にSMILY BASEが入り、そこから他のシリーズにも目を向けてもらえること。そしてその先で、「OSADAのユニット、いいな」と自然に思ってもらえる理由が生まれることです。

長くユニットづくりに関わってきた中で、正直に言えば、社内でもかなり思い入れは強いほうだと思っています。自身の子供だと思っています。

だからこそ願っているのはただ一つ。現場で、元気に、長く、自然に先生のお役に立ち続けてほしい。それが、ものづくりをしてきた人間としての、率直な願いです。